

明治3年5月13日の早朝、徳島県知事、稲田九郎兵衛邦植（いなだくにたね）とともに上京の折、蜂須賀家臣ら洲本在住の徳島藩青年武士800人、銃士100人と銃卒4個大隊、砲4門からなる部隊が、洲本下屋敷町の家老稲田邦植の別邸や益習館（えきしゅうかん稲田家の学問所）、宇山の稲田武山邸や市中の稲田家臣の屋敷を襲い、無抵抗の者を殺傷し、火を放った。これによる稲田家側の被害は、自決2人、即死15人、重傷6人、軽傷14人、別邸や益習館などが焼失と多数に及んだ。この年は庚午の年であったことから、庚午事変とも呼ばれている。

ことの起こりは、明治維新に伴う禄制改革で稲田氏の家臣を士族とするか卒族とするかという、武士の身分問題、そして経済問題がありました。

江戸時代の淡路は、阿波の蜂須賀氏の支配下にあり、洲本には家老の稲田氏が派遣されていた。この稲田氏は単なる家老ではなく、蜂須賀氏との間には次のようないきさつが



あったといわれています。蜂須賀氏の祖である小六正勝と稲田氏の祖の植元の間には義兄弟の約束が結ばれ、ともに豊臣秀吉のために戦った。蜂須賀氏が龍野5万3千石の領主になったとき、稲田氏にも河内2万石を与えようという話もあったが、稲田氏は客分として蜂須賀氏にとどまったという。

このため蜂須賀氏が、阿波・淡路の領主になると、1万4千5百石という大名並みの知行地をもらい、多数の家来を抱えて、洲本城代や淡路仕置職に度々任じられた。

稲田氏は、豊かな経済力をもち、また公卿とも縁組みをするなど、その地位は高かった。幕末には、蜂須賀氏が公武合体派であったのに対し、稲田氏とその家臣は積極的に尊王攘夷派の運動に参加していった。このようなことから稲田氏の家臣は、蜂須賀氏の家臣から陪臣として軽蔑されながらも、一種の誇りをもっていた。

解説：陪臣（ばいしん）は、家臣（臣下）の家臣を指す語。又者（またもの）、又家来（またげらい）とも呼ぶ。陪臣に対比し、直属の家臣を指す場合には直臣（じきしん）または直参（じきさん）という。直臣と陪臣の差は、封建制において重要であり、実際の職制や社会権力とは別に直臣の方が家格が高いということがあった。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：卒族（そつぞく）は、明治時代初期の身分呼称の一つである。江戸時代において藩によっては「同心」、「足軽」などの名称で呼ばれた武家社会の末端にあった人びとであり、士分格（武士身分）を有さない下級の家臣がこれにあたる。明治新政府によって1870年（明治3年）より一律に「卒族」の呼称が開始されたが、2年後に廃された。

廃止にあたっては、それまで身分を世襲していた者は「士族」に、一代限りの家臣は「平民」に編入された。なお、新しい族籍にもとづいて戸籍が作成されたのは1872年（明治5年）のことであり、これは同年の干支を採って「壬申戸籍」と称された。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

明治政府は、明治2年に武士の身分を士族と卒族に分け、禄高もこの身分に応じて減らすこととした。稲田家当主は、一等士族として最高の千石給与となったが、稲田家家臣は陪臣のため卒族にされることとなった。卒族では藩から僅かな手当てが与えられるだけなので、将来の生活に対する不安は大きかった。また、稲田家との主従関係が断ち切られることに対する不満も強かった。稲田家臣は、三田昂馬を中心として、士族への編入を嘆願するとともに、稲田家の分藩独立運動をおこした。

解説：三田 昂馬（みた こうま、1836年4月30日（天保7年3月15日） - 1901年（明治34年）5月20日）は、幕末から明治期の徳島藩家老稲田家重臣、裁判官、政治家。貴族院勅選議員。初名・直方、号・高陽間人

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

このような稲田家の動きが、蜂須賀本藩一部の家臣の激しい怒りをかい、平瀬伊右衛門・大村純安・多田禎吾ら洲本在住の一部過激派の決起となった。

阿波でもその日、本藩藩士の不穏な動きがあったので、脇町近辺在住の家臣の中には高松藩領へ逃げ込んだ者も多かった。

この事件に対する中央政府からの処分は予想以上に厳しく、徳島藩側主謀者10人がうち首（のちに切腹）、八丈島への終身流刑27人、その他禁固、謹慎など多数に至るに及んだ。一方、稲田家側は、10月15日、朝廷から主人の稲田邦植以下、家臣全員に北海道の静内郡と色丹島（後に返上、現北方領土）への移住開拓が申しされ、翌年日高国静内へと移っていった。今日名馬の産地として有名な静内の丘の上には開拓100年を記念して彼らの苦闘を語る大きい記念碑が建てられている。 ～以上要約。

また、ウィキペディアによると、「庚午事変（こうごじへん）は、明治3年（1870年）に当時の徳島藩淡路洲本城下で洲本在住の蜂須賀家臣の武士が、筆頭家老稲田邦植の別邸や学問所などを襲った事件。稲田騒動（いなだそうどう）とも呼ばれる。結果的に淡路島の帰属をめぐる重要な事件となり、この事件の影響で淡路島は再び徳島県から離れ、兵庫県に編入された。」とあります。出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

さらに、徳島県立文書館 平成18年度 歴史講座 【第5回】

題：庚午事変とその関係文書からの問いかけ（講師：松本博氏）によりますと

「庚午事変・稲田騒動」という事件はあまりに複雑で一言でお話しすることはとても難しいことです。しかも民衆（収奪されている人。抑圧を受けている人。差別を受けている人。この時代をもう一歩前へ進めていきたいと思っている人。この様な人たち全て。）の姿を研究対象としていた私は、「庚午事変・稲田騒動」の研究からかなりの期間離れていまし

た。この事件については多くの諸先輩の方々がたくさんの資料を紹介していただいているが、どうも民衆の姿が見えてこなかったのです。しかし、今回の文書館の展示に向けての勉強会の過程で、少しでも民衆の姿が見え始めてきたのではないかと感じます。例えば、国立公文書館が所蔵する公文録の検討から、洲本襲撃に士族でない身分の人たちである農兵が1, 478名参加していることなどが判明したのです。

1 庚午事変・稲田騒動との関わり

私と「庚午事変・稲田騒動」との関わりは、昭和35（1960）年の大学の卒業論文のテーマとしたことに始まります。

卒論のテーマを明治維新时期と考えていましたが、その頃はまだ『徳島県史』も出ていなかったけれども、いろいろな出会いによって決めていきました。私の主任教官であった横田健一先生から紹介された方に後藤捷一先生がおり、大阪の三国本町の自宅までお伺いして、お話を聞くことができましたことが懐かしく思い起こされます。後藤先生から「庚午事変に関する研究にはろくなものがない。」という言葉をしていただき庚午事変の研究することに意を強くしましたが、実はその言葉の真意は別にあったのです。たくさんの近代史料を紹介していただいた中に後藤先生自身が寄稿された『兵庫史学』という雑誌がありました。事件の具体的な基本史料の紹介でした。

淡路の洲本図書館で出会った資料に、昭和29年(1954)に出た本で淡路方の人たちの心情が非常に良く表れた資料『増補稲田家昔物語』があります。又、徳島県立図書館で出逢った資料に徳島毎日新聞の記者であった井上羽城さんが昭和4年5月から7月にかけて新聞に連載された「庚午事変稲田騒動 60年前の夢明治維新の犠牲」があります。これは公文書などもたくさん載せられて、徳島寄りではありますが、客観的に書かれています。これらを今のようにコピーなどはないのでペンで写しましたが、遅々として進まなかった記憶があります。さらに、洲本が攻撃されたとき自殺に追い込まれた藤井一郎の孫である藤井恪三さん（当時の洲本稲田会の会長）に直接会いに行ったこともあり、お叱りを受けながらも貴重な資料をいただいたこともありました。

卒業論文は『日本歴史』175号に「蜂須賀藩における庚午事変稲田騒動とその諸環境」として掲載されました。その後研究報告をする機会ごとに感じたことは、当時はまだどうしても徳島方か、淡路方かという庚午事変を評価する立場の違いの影響が強く残っていたのかなという気がします。このとき後藤先生が「庚午事変に関する研究はろくなものがない。」といった真意は、庚午事変・稲田騒動を歴史上の出来事として整理をしてきっちり日本の歴史の流れに乗せるような営みができていないところにあるのだということに気づいたのです。

その後、昭和36年に金沢治先生が中心になって出された『庚午事変とその前後』、八丈島へ流罪となった平瀬所兵衛の孫、平瀬金造さんが出された『庚午事変の面影』などの本にも出会うことができました。

ここで、昭和43年にNHKが制作してラジオ放送した、歴史のふるさと「最後の切腹」のテープを聴いていただきます。金沢治先生、新見貫次先生を始め今では貴重な証言ばかりです。私も案内役をさせてもらっています。～30分ほど録音テープの紹介～

2 騒動の歴史的背景

騒動の歴史的背景にはいろいろな説があります。まず、藩政初期の蜂須賀氏と稲田氏の関係を重視する必要があるのではないかという説。蜂須賀氏が播州にいる頃稲田氏も2万石の大名になるはずであったのに蜂須賀氏に稲田氏は友情関係によって従ったという経緯があるといわれます。

次に稲田家の役職である洲本城代の成立事情です。かなり資料をあさりましたが判然としないところがあります。実際に洲本城代がどういう役職でどのような職務であったのか、時代によっては名誉職（めいよしょく）のようになっていなかったのだろうかなどの不明点があります。稲田陪臣層は3000人あったといわれますが、全ては武士ではなかったとされています。農民身分から武家奉公人の形で仕えていた人も多かったといわれます。また、稲田家は大坂に蔵屋敷を持っており、利殖をすることができたといわれます。具体的にどんな経営が行われていたのかはわかりませんが、そういった経済力に養われながら稲田陪臣層が活躍できたという流れがあります。

また徳島藩と稲田家家臣との間には学問の流れの違いがあります。小倉富三郎の史料を見ていただいてもわかると思いますが、徳島の学問は儒学・朱子学が強く表れていますが、淡路では本居宣長以前から庶民の中にも国学の流れがあったとされています。

さらに、直臣と陪臣の差別です。稲田家の家臣は浅黄色の足袋をはかされ、見たらすぐに陪臣であることがわかるようになっていたというような差別がありました。

そうした様々な確執の上に、維新の変革による禄制改革や身分制の改革があり、大きな事件が起こったのです。

もう一つ強調したいことに淡路の政治地理的環境があげられます。幕末開港以来、淡路は紀淡海峡や明石海峡を押さえる重要な政治地理的環境にありました。その中で「右（淡路島）総押さえは家老稲田九郎兵衛へ委任つかまつり」とあります。さらに「土着の士も指し置き」とあり、文久年間頃から農兵が海防に関わっていたことがわかります。さらに淡路の菊川兼男先生の淡路農兵の研究によれば、農兵の大部分は淡路の蔵入地（徳島藩直轄地）の百姓であり、稲田家の給知農民は農兵となっていないと資料に基づいて言われています。そういった農兵達が洲本攻撃に加わっていたとすれば、稲田家がそうした農兵を厳しく使役していたということが裏にあるのかもしれないという推測もできるのではないのでしょうか。

新見貫次先生は『洲本市史』の中で、「稲田方を洲本まで徳島から攻めに來たように考えると間違ふ。初めから両者が洲本の町中に雜居してゐて、隣のものを攻めると言うこともあり得たのである。主として洲本市内同士での争ひであつたことを考えねばならない。」と記されています。その一方、庚午事変・稲田騒動ではかなり暴虐な振る舞いもあったとされています。さらにこの他にもいろいろな事実が隠されているように思えるのです。

3 武田家文書の「時勢見聞録」

美馬郡東端山みまぐんひがしはばやま（現つるぎ町）の庄屋武田家には「時勢見聞録」という資料が残されています。この資料は民衆の立場から戊午事変・稲田騒動を考えるとときに重要な資料だと考えるので紹介します。

まず、美馬郡代が村々へ出した「達し」です。これは戊辰（慶応4年・明治元年1868）正月23日に出されたものです。内容は阿波国から出された「制札」はこれまでどおりそのままにしておけ、公儀（幕府）からの御制札はことごとく撤去して庄屋宅に置き郡代所に差し出せ、としています。幕府の言うことは聞かなくて良いが、藩の言うことはこれまでどおり聞きなさいということです。正月3日には鳥羽・伏見の戦いが始まり、7日には慶喜追討令が出され、2月3日には天皇親征の詔が出るというような時期です。

その次の史料は、稲田九郎兵衛に宛てた朝廷からの指令で、慶応4年正月2日に出された勤王・討幕派での活躍を証明するものです。これは『民政資料』にも紹介されています。

次の資料は知事蜂須賀茂韶が明治2年9月12日に藩士に対して出した資料で、兵制改革に失敗し、戊辰戦争に行くことは行っていたけれど、十分な活躍ができなかったことに対して他藩から笑いものになっていることが悔しいという内容です。今後万一のことがあれば藩を挙げて王事に尽くさなければならぬとしており、この経緯をふまえて藩士達が戊午事変の時立ち上がったという側面も考えなければなりません。

さらに次は、稲田家を襲撃したときに建てられた阿波と淡路の各地に「建札」です。稲田が許せないと言うことを書いた檄文です。

おわりに

今後さらに戊午事変の真実をあきらかにするためには、維新史の矛盾の中身、指令がどう出されどのように通用したのか、というような権力の秩序がどうであったのかを考えなければならぬでしょう。

戊午事変・稲田騒動の直前に、戊辰戦争で活躍した長州の奇兵隊らが藩の常備軍を編成する際に「脱隊騒動」を起こし、木戸らに切り捨てられていくという事件が起きます。このとき農民一揆と一緒に大騒ぎになっています。北海道大学の田中彰さんはこの時期について「複合的矛盾が重層的な危機を招いている。」と述べています。これは底辺に農民達の世直し一揆があり、その上に脱藩浮浪の徒・草莽（そうもう）等がいて士族の批判をしていること。さらにその上で薩長藩閥と旧幕府派がせめぎ合っていること。さらにその上に王政が存在し、藩閥がその権力を取り込もうとしていること。どの階層を見ても複合的な矛盾がありせめぎ合っているのが明治2年・3年の状況なのだとしています。

これまで戊午事変は武士同士の私闘であり民衆の姿が見えてこないと考えてきました。しかし、史料やこれまでの研究により農兵の問題を始め、様々な階層の動きが見え始めて来ているのです。

解説：草莽（そうもう）は、民間にあって地位を求めず、国家的危機の際に国家への忠誠心に基づく行動に出る人（草莽之臣）を指す。特に幕末期の日本においては特殊な意味を有する。出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

もう少し具体的に見てみますと、「この事件は日本史上最後の切腹刑がおこなわれ、また岩倉具視（の謀略説もある）によって多くの犠牲者を出し、さらに北海道の荒れ地にその被害者たちを追いやった事件。」とも言えます。

*稲田騒動（庚午事変）までの歴史的背景を溯ると

稲田家の祖とされる稲田植元（たねもと）は1545年尾張岩倉生まれ、1628年阿波脇町没。尾張岩倉城、織田本家の家老筋の稲田大炊助貞祐の三男。蜂須賀小六と義兄弟の契りを約し共に行動し、阿波蜂須賀藩筆頭一番家老的立場となり阿波脇城番を勤める。子の示植はのちに徳川幕府の命により淡路洲本城代となり、稲田家は明治維新まで代々洲本城代を勤めた。植元の幼名は亀之助、のちに太郎左衛門。通称左馬亮。隠居名宗心。

蜂須賀小六と稲田植元の間には義兄弟の約束が結ばれ、ともに秀吉の天下取りの為に戦った。そして秀吉は蜂須賀小六に龍野5万3千石を与え、稲田植元に河内2万石を与えようとしたとき、稲田植元はそれを断った。植元は、「拙者は小六正勝と兄弟の契りを結び、ともに働かんと約せり。然るに今大封を給はれりとて、河内に赴いては正勝との約束を果たすことが出来ぬ。希くば拙者の請を許され」と固く辞した。これを聞いた秀吉は潔白なる義を重するものとして、色々な引き出物を植元に与えこれを許した。そして稲田植元は客分として蜂須賀小六正勝と共に龍野に入った。



1585年、蜂須賀家政が、阿波の領主になると、稲田氏は約1万石（のち1万4千石）という大名並みの知行地をもらい、多数の家来を抱えた。そして最初に脇城の城番となる。このとき稲田氏は譜代の家臣88騎を龍野から連れて来たといわれる。その後阿波で新規家臣を多く召し抱えて合わせて約500名となった。これらの名簿は脇町の稲田家の

猪尻役所に残されていた「稲田家御家中筋目書」という古記録にある。中には旧武田の家臣や、加藤清正の家臣だった者もいた他、いろいろな国の者がいて、諸国遍歴浪人といった感じだ。それら稲田家旧譜代のうち、徳川時代、1万石以上が大名である。もともと蜂須賀家とは別格の稲田家、当時の阿波は17万石（のち26万石）であるが、この規模の大名が万石を越える大名クラスの家臣を持つことは少なく、いかに稲田家を特別扱いしていたかがうかがえる。1597年の分限帳によれば、2代示植しげたねは9378石とあり、その知行地は美馬郡の脇・猪尻・拝原・矢倉・重清・半田・岩倉、三好郡の加茂、板野郡の広島など、北方に集中していた。

ところが、元々からの蜂須賀家の上級家臣たちは、よそ者の稲田家が特別扱いされるのを良くは思わなかったようである。また、稲田家臣団は蜂須賀家臣団からみれば、家老の家臣、陪臣であると蔑視していた。本藩武士が白足袋を着用するのに、あさぎ足袋しか認めなかったなどの差別を受けた。（洲本の稲田侍はそうだが、阿波配地の稲田侍は白足袋を履いていたという。少し遠慮してか、わざと少し汚したのを履いたとも。）

しかし稲田家臣らは、稲田家は家臣ではなく客分である。素性をいえば初代稲田植元は織田家の老臣稲田大炊助貞裕（おおいのすけさだひろ）の子であり、蜂須賀小六は土豪あがりにはすぎない。洲本城代も、大阪冬の陣の戦功を家康に認められて、その命によりなったので、蜂須賀家の恩封ではないという意識がある。実際、徳川秀忠の時代の徳川家の文書に「稲田藩」としてしるしたのがある。こういったわけで両者の間では、隠然たる反目があった。これが明治維新時の版籍奉還時までもしこりを残し、稲田騒動という事件が起きた。

*稲田騒動（庚午事変）当時の状況は、

幕末、蜂須賀家当主齊裕（なりひろ）が徳川の出であり、松平姓も許されて松平齊裕であったため、最初は佐幕派であった。しかし、いよいよ情勢が不安定になると尊王か佐幕か日和見になり、右往左往していた。

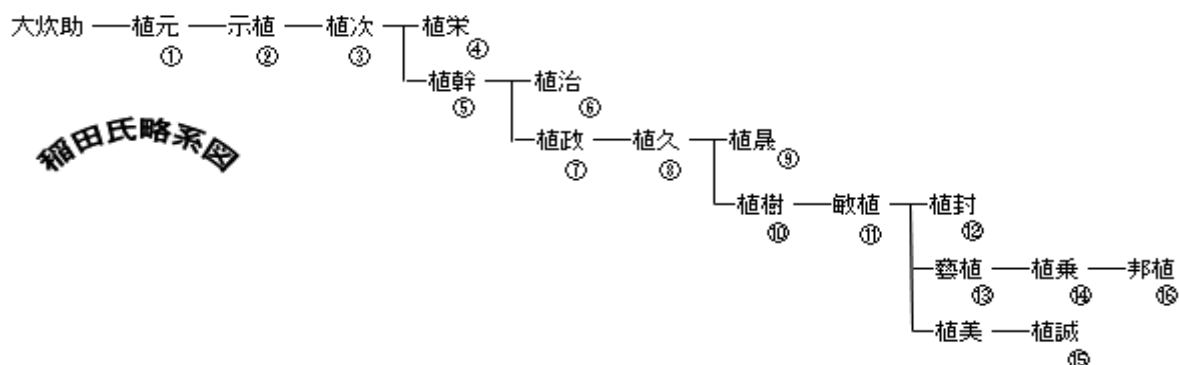


稲田家の紋章「丸に矢筈」と蜂須賀家の紋章「丸に卍」

ところが稲田家主従は本藩の優柔不断を尻目に、最初から濃厚な倒幕派であった。本藩から陪臣として差別されていたことも、討幕へと流れていったのであるが、特に猪尻衆の尾形長栄、竹沢寛三郎、南薫風、工藤剛太郎らは尊王の大義を早くから説いていた。幕末の稲田家に課せられた淡路警護では、早期から外圧を肌を感じ、尊王攘夷運動に傾斜していった。

稲田 14 代植乗（たねのり）の頃、阿波藩では 1829 年 12 月に海部郡牟岐浦の沖合に黒船が来航し、大騒ぎとなる事件が起こった。それを契機として稲田家は、阿波藩の海防に重要な役割を担うようになる。

稲田植乗が 1860 年病死し、17 歳で当主になった植誠（たねのぶ）はさらに海防に力を入れた。そのためには家臣団を充実する必用があった。1832 年に 653 人であった家臣が、1842 年には 1311 人。さらに 1849 年には 3000 人にも増えていた。この新規召し抱えには多額の財が必用となり、藩内の豪農たちから多額の借財をしていたようだ。しかし村役人や豪農の次男、三男を、冥加銀をおさめることを条件に召し抱えるという巧妙な手段で、いっきに負債整理もできたようだ。稲田の配地では、無格無禄の家臣が多くいた。配地の豪農や庄屋、村役人らに特別の身分を与え、苗字や帯刃、乗馬を許し、夫役も免除し、本百姓の上に立たせて配置における各種の役目をもたせていた。



中納言一橋慶喜が徳川 15 代将軍に就いて僅か半月後の 12 月 25 日、公武合体を主張する孝明天皇が 36 才で急死した。これによって倒幕派の勢いは決定的なものとなっていく。

孝明天皇は攘夷論者ではあるが倒幕派ではない。三条実美ら長州、薩摩らと手をくみ倒幕を策した七卿を朝廷から追い出したぐらいで、彼ら尊王攘夷派にとっては当の天皇が壁であった。

死因は天然痘ということになっているが、病は快方に向かっていたし、死ぬときは凄まじい形相で苦しみ悶え、目、耳、鼻、口、肛門などから噴血して死んだ。天然痘ではこのような死に方はしない。崩御の直後から毒殺の噂が流れた。定説では毒を仕込んだのは岩倉具視の姪にあたる女官で、首謀者は岩倉具視だという説である。岩倉は文久 2 年にも天皇毒殺未遂の疑いがもたれたことがある。この時岩倉は親幕派で、幕府から多額の賄賂を受けて、皇妹和宮の徳川家降嫁に反対であった孝明天皇を除こうとしたということである。岩倉はこの事件以来、洛外の岩倉村に蟄居の身であったが、その間に何故か武力倒幕派に豹変した。長州、薩摩と接触を深め、宮中の反幕派公卿を掌中におさめて、いつのまにか隠然たる黒幕にのしあがっていたと云われる。わずか 150 石の平公卿とは思われぬ凄腕で、何をやるか分からないようなところがあったと云う。そして孝明天皇の死後、追放されていた倒幕派の公卿たちがいっせいに宮廷に復活した。

解説：毒殺説もある「孝明天皇」が幕末に残した衝撃

・慶喜への将軍宣下の直後に死亡

慶応 2 年 12 月 5 日（1867 年 1 月 10 日）、孝明天皇が二条城で将軍宣下を行い、徳川慶喜は 15 代将軍に就任した。

これまで再三、将軍就任を拒んできた慶喜に決断させたのは、やはり孝明天皇である。慶応 2 年 11 月 27 日に孝明天皇が将軍宣下の内勅を慶喜に下している。慶喜も孝明天皇に言われると、無碍にはできない。また、諸外国に約束した兵庫開港の期日が慶応 3 年 12 月 7 日と約 1 年後に迫る。切迫する外交問題も、慶喜に将軍就任を決意させた。

そんな中、同年 12 月 25 日、孝明天皇が突然崩御してしまう。慶喜が将軍宣下を受けてから、わずか 20 日後のことである。

死因は天然痘と診断されたが、毒殺説も根強い。というのも、孝明天皇の死によって、その子である明治天皇が 14 歳の若さで践祚（せんそ）することになった。薩摩藩をはじめとする倒幕派は、宮廷クーデターに成功。倒幕へと弾みをつけることとなった。

一時期は緩解に向かっていた症状が不自然に急変したこともあり、「倒幕派が孝明天皇を葬ったのではないか」とうわさが立つことになった。孝明天皇の病状は、どのように変化したのだろうか。

『孝明天皇紀』によると、慶応 2 年 12 月 15 日から孝明天皇は高熱を発した。その翌日に、吹き出物が出てきたため、17 日に待医たちが痘瘡（とうそう）だと診断を下す。18 日の夜には、2、3 カ所で痘の色が紫色になったので、塗り薬をつけ、漢方の「拔毒散」を服用している。19 日には、発疹（ほっしん）が水泡状に腫れあがってきた。夜は

安眠できなかったものの、その後は順調な経過をたどる。23日には、発疹からの膿も出切った。医師たちも「明日からは、かさぶたができるだろう」と安堵していた。

その快方ぶりは食事にも表れる。病に伏せた当初は重湯くらいしか食べられなかったが、発疹が緩解（かんかい）に向かった23日には、ほぼ通常の食事をとれるまでに回復した。「今朝より至極静かで落ち着いたご様子」23日の食事メモには、そう記載されている。待医たちのほっとした様子がありありと伝わってくる。

- ・不自然な死により、ささやかれた「毒殺説」

しかし、24日の夕方から事態が急変する。下痢と嘔吐の発作に苦しむようになり、脈も微かなものに変化していく。そして四肢が冷たくなり、25日に孝明天皇は突然の死を迎えることになった。大納言の中山忠能は、娘の慶子が孝明天皇の後宮に入っていたため、天皇の病状について娘から情報を得ていた。『中山忠能日記』には、孝明天皇の最期について、次のように書かれている。

「二十五日後は御九穴より御脱血」「九穴」とは、両目、両耳、口、鼻腔、尿道口、肛門のことで、そのすべての穴から出血したという。すさまじい最期だったことがわかる。回復傾向にあっただけに、病状が急変して死亡にまで至ったことに、周囲は騒然する。その不自然さから、まことしやかに「毒殺説」がささやかれることとなった。

慶応3年1月5日、横浜から兵庫へと赴いたイギリスの外交官アーネスト・サトウは、プリンセス・ロイヤル号の甲板で、日本の貿易商人から「孝明天皇が崩御した」という知らせを受けた。そのときのことを次のように回想している。

「天皇は天然痘にかかって死んだということだが、数年後に、その間の消息に通じている一日本人が私に確言したところによると、毒殺されたのだという」

当時から、孝明天皇の死には暗殺がうわさされていたことがわかる。先に紹介した『中山忠能日記』には、女官の手紙も収められており、そこにも「孝明天皇は毒を献じられた」という「献毒」のうわさが書かれている。周囲の影響を考えて、孝明天皇の死が4日間、隠されて29日に公表されたことも、黒いうわさにつながったようだ。

- ・主犯として名前が挙がるのは「岩倉具視」

もし、暗殺されたとなれば、誰の仕業なのだろうか。後世の研究者により、主犯として名を挙げられているのが、公家の岩倉具視である。「王政復古の実現を強く願っていた岩倉にとって、親幕派の孝明天皇は大きな障害だったはず」とし、毒殺する動機が十分にあるというのだ。

当の岩倉はといえば、孝明天皇が崩御されたと聞いて、驚きを隠せなかった。国学者の坂本静衛に宛てた手紙で、「仰天恐愕、実に言うところに知らず」と嘆き、「無量の極に至れり」と無念さを吐露している。手紙には次のようにもあった。

「いささか方向を弁じ、少しく胸算を立て、追々投身尽力と存じ候処、悉皆画餅（しっかいがべい）となり」

岩倉は胸算用を立てていたが、孝明天皇の崩御によって、すべて画餅に帰したというのだ。

いったい、どんな計画を立てていたのか。「全国合同策密奏書」によると、岩倉は慶応2年に孝明天皇に対し、「実ニ朕ノ不徳、政令其当ヲ失ヒ、統御其宜ニ違ヒ候ヨリ致ス所」との勅を出すべきだ、としている。つまり、国内の混乱をあえて「自らの不徳」として、責任を引き受けたうえで政治の一新を担うべしと、岩倉は孝明天皇のリーダーシップに期待していたのである。

それだけに、突然の死によほど失望したのだろう。岩倉はこの手紙で「木こりになって山に籠もる」とまで言っている。もし、岩倉が孝明天皇暗殺の首謀者だったとすれば、この手紙はカモフラージュということになる。岩倉の深謀遠慮を思えば、ありうる話だが、同時にそんな岩倉が、天皇の発病という偶然に頼って、重大な暗殺を行うであろうか。また、孝明天皇を計画通りに亡き者にしたということならば、その後は岩倉が朝廷改革を主導したはずである。しかし、実際には、朝廷には人材が枯渇しており、また薩摩藩も倒幕に踏み切るような状態ではまだなかった。

では、孝明天皇亡き後に、朝議を思いのままにしたのは誰だったのか。それは、ほかならぬ徳川慶喜であった。孝明天皇の崩御によって、徳川慶喜は最大の後ろ盾をなくしたとされている。そのこともまた「倒幕派が孝明天皇を暗殺した」といううわさに真実味を与えてきた。

出典：真山 知幸（まやま ともゆき）Tomoyuki Mayama 氏のHPより

著述家 1979年、兵庫県生まれ。2002年、同志社大学法学部法律学科卒業。上京後、業界誌出版社の編集長を経て、2020年独立。偉人や歴史、名言などをテーマに執筆活動を行う。『ざんねんな偉人伝』シリーズ、『偉人名言迷言事典』など著作40冊以上。名古屋外国語大学現代国際学特殊講義（現・グローバルキャリア講義）、宮崎大学公開講座などでの講師活動やメディア出演も行う。最新刊は『泣ける日本史』『天才を育てた親はどんな言葉をかけていたか？』。掲載以上。

さて、明治維新。新政府の勤王稲田侍たちに対する処遇は信じられぬほど冷たいものであった。明治2年、政府は全国の武士に対して、武士の身分を士族と卒族に分け、禄高もこの身分に応じて減らすこととした。そのため稲田家当主邦植は、一等士族として最高の千石給与となったが、稲田家臣は陪臣（家臣の家臣）ということで、卒族とされ平民とされた。

新禄制では、士族は次の8等級にわけられた。及び稲田家での役職名(小姓が家老格)

家 老：一等給	千石	1.無足小姓	9.杖突
中 老：二等給	二百石	2.中小姓	10.持弓
物 頭：三等給	百石	3.中小姓準格	11.弓準格
平 士：四等給	三十～五十石	4.徒士	12.持筒
大小姓：五等給	十石	5.日帳	13.鉄砲
中小姓：六等給	八石	6.会処支配	14.無格
御帖格：七等給	七石	7.会処言上	15.長柄
徒 士：八等給	四石	8.裁判言上	16.小人

足輕以下は平民となり無給。藩主は華族となる。蜂須賀家では他に連枝一門に 300 石、小奉行 7 石。ただし稲田家では上記のような役職名を使わず、稲田家独自の役職名を使っていた。

稲田家では、家老格といえども陪臣は卒族扱いとされるため、550 石あった井上九郎右衛門、250 石の林八左衛門、160 石の七条弥右衛門らも平民となり、国からの禄は無くなる。それら卒族では藩から僅かな手当が与えられるだけなので、将来の生活に対する不安は大きかったし、また稲田家との主従関係が断ち切られることに対する不満もあった。稲田家の家臣三千人余りとその家族が、路頭に迷うことになる。最初から尊王攘夷で活躍し、現に朝廷や薩摩も長州も稲田家を稲田藩とか、洲本藩とか呼んでいたのに、稲田家臣団の士族編入は、新政府が容易にかなえてくれると確信していた。

そのためまず藩知事に士族編入を要望したが、徳島側は最初これを拒否した。また新政府も、陪臣をここだけ例外的に士族編入したなら、全国でも同じような要求が起こり、国家財政が破綻することを心配した。稲田家臣団は、理論上の指導者、三田昂馬（100 石）を中心として、士族編入の理由として、

第一に、蜂須賀小六が龍野の大名になるとき、稲田氏も河内の大名になる機会があったにもかかわらず、それを返上した別格の家柄であること。

第二に、稲田家の主従は討幕運動に活躍したこと。

第三に、討幕に奔走したことが、蜂須賀家の立場をよくしたこと。をあげている。

この嘆願は明治 2 年にはじまり、その後二度行われたが、藩知事の権限を越えていたので、藩知事は、混乱を避けるためにも藩の重役井上高格（たかのり）を政府に派遣して稲田家旧家臣団の士族編入を副申することにした。それに対して政府は藩知事の判断で処理することを指示したので、藩では稲田家家臣団のうち、士族編入組と、卒族組に分けて名簿を提出するよう申し渡した。これに対し稲田側は、士族と卒族に分けることは出来ないと回答したため、藩知事はこの問題の早期解決のために、全員の士族編入を認めることを通達した。しかしながら、気をよくしたのか稲田側は要求をエスカレートさせ、稲田邦植を知事とする洲本藩の独立を要求するようになった。その実現をめざす家臣たちは、洲本城下の稲基神社に結集して嘆願の成就を祈願するとともに、一致した行動を起こすための誓詞をたてて血判している。

これらの稲田側の行為に徳島藩士らの怒りは頂点に達したと思われる。また、稲田のこれら運動は新政府の中央集権化とはなはだ矛盾していた。

そこで、明治 3 年 3 月 21 日に岩倉具視は両者を切り離すことを考え、稲田家臣全員の士族編入を認める代わりに北海道移住（静内郡と色丹島）と、徳島藩側にはそれらの費用をむこう 10 年間にわたって負担するよう命令を出した。

そして両者の間を取り持つための交渉役として、元徳島藩士で岩鼻知藩事の小室信夫と、元稲田家臣で福島知藩事の立木徹之丞を、それぞれに送ったりしたが、解決には至らなかった。

このような稲田家の動きが、徳島本藩一部の家臣の激しい怒りをかい、特に若い指導者たちは、蜂須賀恩顧に対する不忠の行動だと決めつけ、藩知事に稲田討伐の決議書を提出した。その思想的中心的指導者は藩の儒者、新居与一郎であった。

稲田討伐決議書を提出した翌日に藩知事は暴挙を慎むようにと諭告したが、1870年4月20日に藩内の過激派の代表12人が東京に集結。翌21日、こんどは太政官に稲田らを訴伐するよう訴状を提出した。これに驚いた太政官は、彼らを神田一ツ橋にあった徳島藩邸に謹慎を命じ、藩邸から出ることを禁じた。そして4月27日、太政官は蜂須賀茂韶と稲田邦植を東京に呼んで事情を調査したが、結論はでなかった。すると5月7日、在京藩兵らは「政府は早くから公家に出入りしている稲田側に同情的だ」と速断して、そのうちの7人が藩邸を脱走し帰郷した。これを知った太政官は7人を取り押さえることを命じた。さらに岩倉大納言からは、藩士らが稲田主従に暴行を加えた場合は、蜂須賀家は断絶するという令状が出された。

そうこうするうち、5月12日藩内に稲田討伐の檄文がまわされ、それに応じた若い士族たちは藩兵隊有志として、夜営演習を口実に数百人集まった徳島藩士たちが決起。徳島城内の稲田家屋敷を焼き払い、翌13日、南堅夫を総指揮とする160名余りの銃隊が猪尻に向かって出発した。一路西進しはじめたとの情報を牧民従事補の板東清内は、その檄文をもっていち早く麻植郡川田村の原田小次郎に伝えた。そこから江沢寛一と、四宮哲夫の二人に頼んで、情報を猪尻の稲田邸に通報した。稲田邸邸吏村吉左衛門はこれを受け取って早々に稲田家中を役所に集め協議した。集まった稲田家中の者約400名、その若い連中のなかには「徳島の連中が藩律に触れようが触れまいが、当方のあずかり知るところではない。すぐに防戦の準備を整え、徳島の弱兵にひとあわ吹かせたい」といきり立つ者もいた。さらに混乱を避けようとする先川牧之進らと、迎え撃つという尾形長栄らの意見が対立し、先川の屋敷で激論をかわした。猪尻には全国各地での戦歴ある稲田侍が400人からいて、しかも日頃から磨いている武術の腕前は徳島のそれとは比べものにならない。実際には、徳島藩の実戦力の半分かそれ以上は稲田家が担っていたともいわれる。そのような状況のなか、猪尻に向かう徳島藩士らは160人余りであった。戦いの勝敗はおのずと明らかであったが、しかし村吉左衛門は、「戦って勝てないことはないが、戦ったら私闘ということだ、稲田家も危うくなる」という判断から衆義は一致し、結局は家臣342人が高松藩内に避難した。徳島方の事実上の指導者の新居水竹が一応、若い連中を押しとどめながらも、結局は暴挙に出てしまったのとは対照的である。

稲田方は夜闇に乗じて間道を抜けて阿賛山脈を越えて讃岐に入った。その際、脇城中にある稲田家の寺の貞真寺にある位牌を持って逃げた。それだけ精神的に余裕があった。一行はその日のうちに仏生山にでた。そこから高松藩に使者を送って、「仏生山に宿舎を提供してくれるよう」頼んだ。

一方徳島方でも、稲田方が土佐や讃岐に逃れるかもしれないと予想して、稲田方を受け入れないようにと両藩に手を打っていた。が、高松藩としては朝廷が高松藩征伐を計画していたときに稲田方から受けた恩義があった。そこで稲田方に敬意を持って接し、宿

を三箇所にて設けて最上級のもてなしをした。一行は居心地がよいせいか、騒動が終わって稲田家から帰ってくるよういわれても、5月27日に第一次41名が戻り、6月21日になってようやく全部が帰ってくるというありさまだった。

一方猪尻進撃の徳島方というのは、徳島藩兵有志達は、南堅夫、小川錦司、三木三郎、海部閑六と、東京から送れて駆けつけた阿部興人らを先頭に猪尻をめざしていたところ、現在の石井町あたりまで進んだところで、追いついた藩吏の下条勘兵衛と牛田九郎の2名が「ことを起こせば殿と蜂須賀家の立場が危うくなるかもしれぬ」と襲撃中止を悲願したが、若い藩士らは、殿は東京に居て、留守の間に我々が勝手に行動を起こしたのだから、殿には責任はなく、自分たちが責任を取ると言っていっこうに応じようとせず、無視して進撃しようとした。そこで下条と牛田は腹を割って見せて説得をした。するとさすがに藩兵有志達も二人を下浦の願成寺に担ぎ込み介抱したが、その日の夕刻に相次いで死んだ。ところが藩兵有志らは、それでもまだ翌日猪尻に攻め込もうと下浦に宿営していた。そこへ東京から急ぎ徳島へ戻った尾関源左衛門と星合常恕両権大参事は、岩倉大納言の「稲田主従に暴行を加えた場合は藩を取り潰す」という令状を伝えるべく、星合常恕、井上高格、蜂須賀協の三参事が早馬を飛ばし下浦へ向い、岩倉大納言の意を伝えた。それを知って藩兵有志達は驚き、岩倉大納言に対する不満大いにあったが、やっと解散することとなった。

ちなみに権大参事の井上高格（いのうえ たかのり）は、後に自助社を結成し、自由民権運動に活躍。第一回衆議院議員選挙に当選し、自由党系議員となった。この徳島の自由民権運動は活発で、それを警戒した政府は徳島県を廃止し、高知県に合併させ、徳島支庁を置いたという時代もあった。

さて、しかしこの阿波の動きに対して、脇町猪尻襲撃が中止された事情を知らない大阪の有志たちは大阪の稲田屋敷を襲撃した。

さらに同じく阿波での襲撃中止の事情を知らない淡路の平瀬伊右衛門・大村純安・多田禎吾ら洲本在住の一部過激派と有志達も、5月12日に農兵を招集。そして翌日の1870年、明治3年5月13日、集まった農兵を主とする兵士約800人、銃士100人と銃卒4個大隊、砲4門からなる部隊が稲田家主従を襲撃した。

洲本の町の辻々には制札がかけられ、本陣から次の軍命が発せられた。

老幼婦女は赦して問わず。

降服謝罪の者はみだりに殺すなかれ。捕らえてこれを本陣へ送れ。

頑固にして服せず、義兵を抗拒する者は誅して可なり。

いやしくも掠奪するなかれ。市郷民家をして兵火にかからしむるなかれ。

我兵の死者、賊徒の傷、また皆これを龍宝院へ送りて、これを治せん。

洲本下屋敷町の稲田邦植の別邸には、邦植は東京にいて留守中であつたが、母の禎寿院と弟の邦衛がいた。禎寿院は近江国甲賀郡水口2万5千石の藩主、加藤氏の姉にあたる。加藤嘉明の子孫である。

稲田方は、非常の場合には、二人を水口に避難させる手筈になっていた。宇山の稲田武山邸が、第一撃目の砲撃を受けた時には、既に全員が邸を離れていた。藩士らは、益習館（稲田家の学問所）、市中の稲田家臣の屋敷を襲い、無抵抗の者を殺傷し、火を放った。

稲田家士の妻女はおろか、下僕、下女、はては自宅で読書中の少年二人を捕らえ、土下座して命乞いをするのも聞き入れず射殺したりした。この少年二人は、甲藤野右衛門夫妻が千光寺に詣っていて、その留守に息子の敬太郎が友人の寅太郎を招いて読書中に、惨劇に遭った。

また、坂井喜右衛門邸では、射殺した嫡男の坂井普之助の手に、よその邸から掠奪してきた手槍を握らせて、応戦したかのごとく偽装させたりもしている。射殺した死体を槍で突き、刀で斬りきざんだのもあった。さらにその妻女は強姦されたり、妊婦はその局部を竹槍で刺し通されたりもしていたようだ。

日頃から物持ちと評判の高かった重役の曾我部直左衛門邸をはじめ、金品家財の掠奪も、思いがけない凄まじさで行われていた。これら軍命違反の行いは、直参の農兵どもがそのほとんどだったようだ。

これに対し稲田側は、かねてからの打ち合わせ通り、いっさい無抵抗でいた。稲田の家士たちは、幕末以来弾雨と白刃のなかをくぐり抜けてきた歴戦の士が多い。戊辰戦争で官軍を支えたのも彼らなら、上野の戦争で活躍したのも彼らである。幕軍を追って、東北各地を転戦もしてきている。その彼らが、応戦も私闘であり、主家を危胎に瀕せしめるという判断にたって、最後まで隠忍自重し無抵抗主義を貫いたその理性的な対応は、この騒動の他に類を見ない著しい特徴であった。

これによる稲田側の被害は、自決2人、即死15人、重傷6人、軽傷14人。他に投獄監禁された者は300人余り。別邸や益習館など焼き払われた屋敷25棟。

自殺者は三宅達太郎と藤井市郎。即死者は、藤本儀三郎・宗田覚蔵の娘・甲藤敬太郎・斉藤寅太郎・浅田藤太夫・井上省右衛門の妻・篠原幸助・中野繁・島木保・坂井普之助・藤岡泰作・丹羽猪右衛門・津田直之進・仁木儀左衛門・徳蔵。

重傷者は、田村政太郎・真鍋領右衛門・堀藤右衛門・佐野堅太・谷美津蔵・安友半平。

軽傷者は、宗田覚茂・田村量平・藤本宣仙・夫上富次郎・種田三郎兵衛・藤井市郎の娘・三宅哲二郎の妻・丹波猪右衛門の妻・谷山万兵衛の妻・清七・角蔵・常吉の妻・津田最中の下女。

焼き払われた建物は、稲田家宇山邸・益習館・三田昂馬・七条弥三右衛門・佐和糺・拝村幸之助・野尻弥三兵衛・津田最中・青山晋・浅野喜太郎・治田実・林直右衛門長屋・矢上美吉長屋・稲田家宇山邸長屋、など。この年は庚午の年であったことから、庚午事変とも呼ばれている。

このとき東京にいた蜂須賀と稲田の両当主は慌てて帰国し、蜂須賀は襲撃に荷担した者らを捕らえ監禁した。

徳島藩庁側では、その被害の調査の進展につれて、憂色は深まるばかりであった。

まず、稲田方が無抵抗であったということは、不必要かつ無慈悲な殺戮を行ったことを意味する。事件を起こした徳島藩士のなかには、これら無慈悲な殺戮をしでかしてしまった結果に責任を感じ、自ら腹を切る者もいた。

その後の政府からのこれらに対する処分は厳しく、徳島藩側主謀者 10 人が斬首（のちに藩知事の感嘆陳情で切腹になる）。これは日本法制史上、最後の切腹刑となる。

主犯格の新居水竹（与一郎）と小倉富三郎は東京芝白金の藩邸で切腹。残りの 8 人（平瀬伊右衛門、大村純安、多田禎吾、南堅夫、小川錦司、三木寿三郎、藤岡次郎太夫、滝直太郎）は徳島の助任万福寺と住吉蓮華寺で切腹した。八丈島への終身流刑は、岩倉具視の家士で、その護衛をしていた阿波出身の海部閑六と六郎親子ら 27 人、その他、鈴木操ら 81 人が禁固、謹慎など多数に至るに及んだ。藩知事、参事らも謹慎処分を受けたが、藩自体の取り潰しはなかった。

政府は一部の激派だけの単独暴動なのか、藩庁が裏で激派を煽動していたりはしなかったか調査した。少なくとも洲本では意欲的に緊急の措置を怠った疑いがある。そのような事実が少しでもあれば容赦なく蜂須賀茂韶を知事から罷免するつもりであった。政府は版籍奉還後も藩主が藩知事となっているだけで、旧体制と何ら変わらない。中央集権化を推進していくうえで、この問題は是非とも克服してゆかねばならない。だが下手な手の付け方をすれば、日本中に反政府の武装蜂起が起こりかねない、そこで、今度の徳島の騒擾事件に多少でも直接の責任があれば、それを口実に藩知事を罷免し、諸国の反応を見る良い機会だと思っていたようだ。

この処罰に対して徳島藩庁は、異例の処置を行った。本来なら死刑や終身刑などの重罪人の出た家は取り潰しになるのだが、死刑者の遺族に家督を継ぐことを認め、流刑者には家族同伴も許し、支度金 200 両も支給した。これは政府に対する公然とした抗議でもあった。これを知った岩倉具視は苦り切った様子で木戸孝允に、一刻も早く廃藩置県を実行するよう書き送っている。

流刑人はその後明治 6 年に早くも減刑されて帰郷・謹慎となり、明治 9 年に赦免され、明治 22 年の憲法発布の大赦で罪名は消された。しかし流刑の間に牢獄死 5 人、病死 5 人を出している。江戸時代よりの流刑地は伊豆諸島にあった。最初は大島などの近くであったが、集団で船を造り脱島をする者も多くなり、しだいに遠く八丈島まで延びた。毎年春か秋の好天日を選んで出向した。このときも明治 3 年 10 月に、他の罪人 36 名の中に混じって出向した。しかし大島で多くの者が死んでいるし、20%の者が三宅島で病死している。生き残った者がひとこともふれないなど疑問も多かったため、虐待や故意の食中毒ではないかといわれる。

そして淡路島は三好氏以来からの阿波の管轄から、兵庫県の管轄に移行する。当時の淡路の稲田侍は、士族 730 人、卒族 2 千余人。そしてこのとき淡路の庄屋らは「徳島藩のままにしておいて欲しい」との訴えを起こしたりもしていた。しかしその後の淡路島は阿波、讃岐が合併して名東県となり一時阿波に戻るが、さらに名東県はまた分離され淡

路は兵庫県に収まる。このとき淡路島の人々に、徳島と兵庫とどちらの所属になるのがよいか調査したりもした。その結果、京や大阪に近い近畿圏に入る方がよいだろうという意見が圧倒的だったそう。今度はその地元の意見が反映されたのだろうか、そうして淡路島は永遠に徳島県から離される事になる。そのような歴史的背景もあり、淡路島の方言は今でも阿波弁的なところがある。

一方、稲田家主従は、1870年9月17日、政府から稲田邦植以下、家臣全員に北海道静内郡への移住開拓が申し渡され、翌年日高国静内へと移ることとなった。（了）

*北海道静内移住

稲田家主従は、稲田邦植は華族に、家臣の一部は士族に認められたが、いまさら淡路には住めまいなどの理屈もつけて、1870年9月17日、政府から主人の稲田邦植以下、家臣全員に北海道の、静内郡と色丹島（後に返上）への移住開拓が申しされ、翌年日高国静内へと移ることになる。稲田邦植、当時15歳であった。しかし、実際に北海道へ移住したのは一部の家臣のみで、新政府自体も3000人もの家臣全員の移住は無理であろうと考えていたようで、百人でも二百人でも移住開拓の事実があれば、あとは見て見ぬ振りをするようだった。新政府も稲田主従に対しては多少なりとも同情心はあったのであろうか。しかし岩倉具視も幕末からの活動で、稲田家から過大な協力を得ておきながら、このような裏切り行為ともいえることをしていた。

[稲田邦植（くにたね）1855～1927年]

邦植は14代植乗の子で、幼名小八郎。洲本城内に生まれる。幼い頃に父を失い、15代植誠の養子となる。養父植誠の死により11歳で家督を相続すると共に、植誠の遺志をついで王事につくし、京都で有栖川宮家や岩倉具視邸に出入りし、南勲風らの家来を王事のために奔走させた。これら幕末の活動で、朝廷より稲田藩と呼ばれ華族に列せられた。明治元年の戊辰戦争が起こると日の御門守衛を命じられたのをはじめ、摂津西宮に出兵、また高松征伐には土佐、丸亀、多度津、などに出陣。また征東総督有栖川熾仁の護衛にあたって江戸に進撃するなど、その活躍はめざましかった。が、幕末前後邦植はまだ年少のため、実質は稲田家重臣の三田昂馬、七条弥右衛門、内藤弥兵衛らが司っていた。



北海道立文書館が所蔵している記録公文書の「開拓使公文録」には稲田の関係文書が多く出ている。

「稲田九郎兵衛並同人元家来、北海道移住等御沙汰之義御達」は、兵庫県眷属稲田九郎兵衛に日高国の静内郡と志古丹島（色丹島）の開拓を命じた事を記した文書である。

その開拓費用は元の知行高1万4500石の10分の1を与えられ、残りを10年間分の開拓費用に充てることが書かれており、決して悪い条件ではなかった。北海道への移住費用は最初、徳島藩が出すことになっていたが、実際は淡路を編入した兵庫県が出した。この淡路島全島を兵庫県に編入したことがまた徳島藩庁を動揺させていた。稲田家の支配地は淡路島では洲本周辺の1万石程であったが、淡路島全島となると7万石であり、それらは徳島本藩の支配地であった。それをまるごと召し上げられたようなもので、徳島側では再び稲田騒動の二の舞が起きそうな雰囲気であった。実際、稲田家の重臣が襲われる事件も頻発していた。もしそのような事態にでもなれば、こんどこそ蜂須賀家は取り潰しになりかねない。そこで知藩事や重役達は、はやく稲田家の北海道移住を実現させるよう政府に訴え、稲田邦植にも五千両の餞別を送って説得に努めていた。

静内郡・色丹島の土地は、それまで東京芝の将軍徳川家の菩提寺であった増上寺が管轄していたが、開拓には見るべき成果を上げることがなかった。そこでそれを引き揚げさ

せて、実際に移住して開拓にあたることを前提にする稲田家の支配地に変えたのである。

静内の土地には江戸時代後期に静内場所が置かれ、昆布・鯨・鮭・鱈・鹿皮などの産物が安定して産出されている土地で、特にシブチャリ川（静内川）両岸には平地が広がっている。北海道の中では比較的温暖かつ積雪も少ない方であり、函館にも近い。というようなことで稲田家が調査に送った重臣の内藤弥兵衛・平田友吉の2名も「将来極めて有望なる土地」であることを認め報告している。しかし色丹島は根室の先の離島で、全くの未開の僻地であり、静内からも遠く支配が行き届かないことなどを理由に支配地の替地を早々に願い出た。替地としては静内に隣接する新冠一帯を希望した。

その結果、1871年3月15日太政官は、静内郡のとなり新冠郡の支配を稲田邦植の増支配とした。この新冠郡は、1869年（明治2）7月から徳島藩が支配していた場所で、徳島藩の役人が詰めていた。それを稲田家に支配を与えたのである。増上寺と同じく一向に成果があがらない徳島藩の支配から、実効のありそうな稲田家に支配替えを行ったようだ。

そして稲田家臣の一部が北海道移住を開始した。1871年2月、男達だけの先発隊47人（30人とも）が2手に分かれて出発した。一方は大阪から伏見大津を経て越前敦賀に出て、日本型帆船を借入し、日本海航路を北上して函館に入り、陸路静内に到達した。もう一方は東海道を経て陸路青森に至り大湊の東南「シツカリ」というところから海路静内に直行した。そして家族等本陣の入植を迎えるための前支度にあたった。

そして第一陣が1871年4月12日に大阪丸、大有丸、鍋焼丸の3艘の雇汽船に、米・麦・農具・家具、それに稲田家に伝わる家宝なども満載して洲本を発ち、品川・金華山を通り太平洋航路を北上した。家臣137戸546人と、農民11戸十数名であった。途中で水や食料の補給にいくつかの港に立ち寄り、金華山沖では強風を避けて湾内に三日も停泊したりしながら、約二十日後の5月2日ついに静内（現在の春立）に上陸し、海岸を北西に約5キロ程歩いて今の東静内に到着した。ここに先発隊によって足がかりが設営されていた。

引き続き出発するはずだった第二陣は、いつまで経っても移住者が集まらず、重役達が説得してまわった。7月半ばには廃藩置県の詔書が出され、日本中から藩とその封建体制が無くなるという事も起きた。8月に入って、静内にいる第一陣の人たちからは、

「第二陣はいつ来るのだ」という苛立った督促の使者も洲本に戻ってきた。そしてようやく秋近くなった8月22日に、予定人数には遠く及ばなかったが、薩摩の藩船平運丸という機帆船をチャーターし、農事指導者の農民数戸を含めた214人78戸と乗組員9名が洲本港を出航した。ところがその日の夕方より海が荒れだし、和歌山県南部の熊野灘で暴風雨に遭う。そして翌23日未明に嵐で流されていた平運丸は操舵を誤り、周参見沖亀岩で座礁し横転、83名が溺死、家財等を失うという悲劇に遭遇する。被害額は稲田家の荷物だけで3万5千両を越えていた。当時16歳で平運丸に乗り込んでいた猪尻の家士先川宋十郎は、その時の様子をこう語り残している。

「・・・それとみるや、皆は丸裸になり、両刀を褌に挟んで海中に飛び込んだが、男ば

かりであれば、猪尻侍たちは吉野川仕込みで水練に熟達しているから、流出物にとりつくか、また陸のほうへ泳ぎ着くが、この乗り組み連中は女と子供連れの多い連中であって、その女子供を救助しながら、わが身も流出物にとりすがりより方法がないために、死なでもの者まで多く溺れ死んだ・・・。」

薩摩人の船長有馬庄之助は藩船を沈めた責任を自らとって8月24日、自決した。

而して生存者は和歌山経由で洲本に戻った。

平運丸の洲本到着は不明であるが、人員の乗船は明治4年8月21日、出航は22日、座礁沈没は23日午前6時頃であった。溺死者は42世帯83名で、内本人19名、妻20名、母及び祖母5名、子女34名、弟妹5名であるが、年齢についてはほとんどの人が不明だ。乗船者名については判明していないものの、死没者の氏名、出身地については、その死者の祭られた八十盤村神社の記録にある。死没者八十余名にちなんで、猪尻の稲基神社の横につくられた神社である。それによると、穴吹3世帯5名、半田6世帯9名、脇町20世帯41名、松茂3世帯5名、寺島2世帯5名、淡路8世帯18名で、脇町が約半数を占めている。

さて静内の方かというと、シブチャリ川（現静内川）沿岸に住み鮭や鹿肉などを常食する狩猟生活のアイヌ集落123戸554人がいるだけであったから、耕地も道路も無い荒地に立った婦人達はその場に泣き伏してしまったという。しかし気を取り直して、七坪半から十坪程度の木造小屋を建て、草葺き板囲いの掘立小屋に仮住まいをしていた。また頓成寺の建物を役宅に定め、漁場の番屋などに分宿した。しかし、持っていった家財道具の置き場所もないので、東静内にあった旧幕府の請負人の佐野専左衛門の漁場倉庫に家財道具一切、冬物の衣類や日常の労働用具までしまい込んであった。この中には稲田家代々に伝わる家宝の多くも含まれていた。

それが、7月30日の夜、失火で全焼してしまうという悲劇に見舞われた。始めて迎えようとする北の冬で、この災禍は絶望的状态であった。その被害額は、これも稲田家の荷物だけで十両を越えていた。北海道の寒さは到底暖石阿波や淡路生まれの者には堪え凌ぎ得られるものではないと訊いていたので、その防寒具というものはどんなものか知らないまま、ただ綿の沢山入ったものを持って行けばいいだろうということで、各戸丹前、寝具の類を多分に用意してきていた。それが全部焼失してしまったのだから、その衝撃落胆はまことに大きかった。

これに対処するため、開拓使から金3000両を借り入れ、さっそく函館に人を派遣して反物、綿、ふとんなどを買い求め、被災者各戸へ綿入2枚、ふとん1枚ずつを与え冬を越した。

また住居の方かというと、東京の加藤幾蔵なるものが請負い、秋田県から材料を入れて建築にかかっているが、その構造はきわめて粗末なもので、木造桁葎、壁は板囲い一枚というものであった。土分は大家といいながら、わずか10坪。それでも明治5年の初めには予定の過半数が完成し、2戸に対して一棟を与え、それぞれの希望によって、身分によって順次入居させていった。

稲田家とその家士達は、どうしてこうまで過酷な運命ばかりを押しつけられるのであろうか。はやくから尊攘運動に挺身しながら、御一新になっても陽が当たるところか、徳島藩士の殺戮と暴行を甘授したうえに北海道へ移住させられ、あげくのはてに冬を控えて火災で全財産を失い、船は遭難して83人もの命を失った。

静内に移住した家臣らは、洲本に実現出来なかった稲田洲本藩を、静内で稲田静内藩をつくることを夢見ていたかもしれないが、時は廃藩置県となってゆく。また士族に認められはしたものの、その生活ぶりは洲本の農民より貧しい農民生活で、そのうちその士族の禄も廃止されてしまう。ちなみにこの士族の称号は大正2年の戸籍改正まで戸籍に記録された。明治初年、約2百万人の武士がいたといわれる。また穢多、非人等の賤民身分の者が平民ならぬ、「新平民」として戸籍に記述されたのは明治5年から始まったいわゆる「壬申戸籍」で、本来政府は「平民」とするよう指示したが、政府自体は賤民身分の解放を心して平民とするよう決めたのではなく、欧米との不平等条約解消のためだった。当時欧米では既に賤民身分は無く、先進民主的な国家を示すためには賤民身分の存在はまずかった。

静内移住家臣たちは強固に生き抜いた。農作業などやったことがない武士達が唐鋤、鎌、刀のみの道具で、道路の開削、橋梁工事や耕地の開拓を共同作業で行った。まず自分たちの居住空間と耕地を確保するためには、森林を切り開いていく以外にほかに方法はなかった。背丈ほどもある草むらを刈り払い、木を切り倒し、その木の根を一つまた一つと掘り返して行き、そこを焼き払って整地、耕して、やっとの思いで出来上がった土地

はわずかなものであった。しかもその土地では米などはおろか、まともな作物一つ作れなかった。また、せっかくの作物が鹿や馬に食い荒らされ、栄養失調とブヨ・アブにくわれて病人が続出したりもした。この辺は野生馬も多かったらしく、松前藩の放牧していた馬の何頭かが逃げ出し、野生馬と混ざり合って更に増えたという話もある。

海辺（下下方）から内陸方面（上下方）を経て、目名まで、幅二間に草や茅を刈り払い、川には小橋を架けて道とした。また稲田屋敷の前の方で開拓を始めた青年達もいたが、この辺りも樹林地であったため手がつけようもなく、初年度は僅か二、三反歩大根を蒔きつけた程度であったという。また農業の指導者になるはずだった淡路の百姓でさえも、先祖伝来の田畑を耕すことしか知らず、原生林を切り開いての開拓は並大抵のものではなかった。

食料はアイヌ土人と同じ、鹿や鮭を狩猟して生きながらえた。また、アイヌの人たちの知恵や力にも大いに世話になっていたようだ。

しかし、彼らの心のよりどころともいえる、肝心の殿様、稲田邦植が東京にいる家臣らに、東京の稲田屋敷に引き留められていた。静内では荒木重雄を東京に送って、殿の静内移住の為には差し違える覚悟で説得にあたった。また稲田騒動の張本人であるはずの三田昂馬は、まったく移住の気配すらなく、東京で官職に出仕してしまう。

移住した家士、瀬川芳蔵の回想録には、当時の様子がこのように書かれていた。

「海辺には土人の通う小道あるのみにて、海岸一帯より原野を望めば、樹林鬱蒼として古来より斧の入りたることあらずや。満目の光景、今日より見れば、誰か当時の状況を想像し得る者あらんや。十余の壮士、一草屋に住し、ただ寝食の処となすをもって、梁間三間桁行六間の一棟にして、土間に草を敷きてむしろとなし、中央に一つの炉を設けて煮炊きの用に供するのみ。夜に入りても、よく灯火あるにあらず。半夜きんじょうを踏むものあり。起きて付け木を点ずれば、数頭の狐屋外に飛び去るを見たり・・・。」

また岩根静一の「北海道移住回顧録」では、「静内郡土人は総て染退川沿岸に住し、鮭の乾魚及鹿肉の干したるもののみを常食とするを以て、誰も耕作をなすものあらず、海辺には根室に通ずる一條の小道あるのみにて、海岸一帯より原野を望めば只茫茫丈余の茅茨目を遮り樹林鬱蒼として古来斧鉞の入りたることあらず、満目の光景今日よりして之を見れば、誰か当時の状況を想像しうるものあらんや、土人の海辺に出るのも只染退川及びメナ川の岸に沿ふて、迂回をいとはず往復する者にて、草を刈り道を通ずる如きは誰も顧みる処にあらず。」二人の回想録の中には全く同じような文言がある。これはどちらかが引用したかどうかは分からないが、最初に移住し苦労して開拓した人々が、今日の静内を見るにその思いがよく感じとれる。

1871年8月の廃藩置県により、北海道全体が北海道開拓使の管轄下となり、静内郡、新冠郡の支配を罷免されるが、邦植は開拓使貫属となり、引き続き静内の開拓に従事することとなった。そして1873年3月に弟の邦衛が先ず入植し、次いで4月に稲田邦植が家族と共についに入植した。邦植はおっとり殿様タイプで、弟の邦衛は活動的だったようである。他に妹のハル子があり、佐藤昌介に嫁いでいる。佐藤昌介は北大総長となっ

た人で、札幌農学校二期生。

そのようななかで、子弟教育のため、明治7年（1874年）、日高国静内郡目名村（現静内郡静内町字目名）の開拓地に、英語教育の稲田英学校を設立したことは驚きである。その経緯としては、1871年9月、洲本「益習館」の再興として、家塾「益習館」をはやくも設立（翌年「目名教育所」に改組改称）。稲田家では、1873年、英語教師として東京在住の旧家臣宗武彦磨（1839～1894）を迎え、翌年に教育所とは別に新しく「稲田英学校」を創設した。それらの学校は人材育成（稲田家再興）の拠点として設けたのであるが、英学校を設立した背景には、土族集団の移住、大村誠卿の英学啓蒙、旧徳島本藩の洋学志向、開拓使農業現術生の洋式農法修業を岩根静一らが Horace Capron や Edwin Dun に学んだことにより将来の開拓事業に英語習得を、緊急かつ必須の課題としてとらえたのであろう。

稲田英学校に学び、また農業現術生となった彼等が中心となって、移住民の開墾農作業・牧草栽培・馬匹改良等を推し進め、結果的には、日本一の競走馬生産地日高の基礎づくりに貢献した。今では馬の放牧にも成功してサラブレッドを産し多くのダービー馬を出したりもしている。こうした悲劇や苦労を乗り越えて、徐々に開拓はすすみ、米作にも成功した。また初代稲田植元が脇町で盛んにし、徳島の名産物となった藍の生産を行い、これも成功させた。

名馬の産地として有名な静内の丘の上には、開拓百年を記念した彼らの苦闘を語る記念碑が建てられた。

なお1877(明治10)年、邦植は西南戦争で予備少尉に任じられ、静内の旧家臣50名程をひきいて東京まで出陣したが、東京で演習しただけで、西郷隆盛が死亡したことにより、家臣共々手当だけ貰って静内に帰ることとなった。

1879年、陸軍少尉となり札幌に住み、1890年、静内の土地・家屋を弟の邦衛に譲り、脇町に移った。そして1896年、男爵になり、正四位に叙せられた。大正9年（1920年）に養子昌植に家督を継がせ、昭和2年に神奈川県で没した。72歳。墓は洲本の江国寺にある。ちなみに昌植は日本スキー連盟会長、大学教授、貴族院議員などをし、戦後は日本大学の講師をやっていた。1968年79歳で没。

現在静内町には稲田家屋敷跡がある。洲本市の江国寺稲田家菩提所には稲田側犠牲者の招魂碑があり、それよりわずかの距離を隔てた専称寺には蜂須賀側処刑者の供養碑「庚午志士之碑」が建っている。これらの一連の事件を稲田騒動または庚午事変というが、当時の人々は、稲田家と蜂須賀家をあいまいなままにしといたんで、その処置を「太閤さんの後始末」とも言っただろう。

なお「庚午事変」というのは、1870年（明治三年）に日本中で起こった事変の総称で、稲田騒動の他に、蝦夷松前藩の庚午事変、越後長岡藩の庚午事変、奥羽盛岡南部藩の庚午事変などがあつた。しかし稲田騒動が一番大きな事変だったためか、庚午事変といえば稲田騒動のことをさす場合が多い。明治維新は薩長土肥の倒幕軍などが、その他の諸藩の変節や協力を得て成功し、新政府を樹立したが、新政府の方針はお粗末なもので変更される事が多かった。そのため新政府に協力した諸藩は、結果的に約束は反故となり

騙される結果となった。そんな情勢下であった 1870 年は庚午の年で、各方面の不満が爆発した年でもあった。



稲田騒動を題材にした小説『お登勢』はNHKの金曜時代劇の第一弾で放送された。



2001 年 4 月 6 日から 6 月 22 日放送



[上陸地：元静内橋]



[真歌公園（シャクシャイン城趾）より、静内町]